

☆☆☆ Library Eye 2020 ☆☆☆

第11号 2021年2月1日(月)

発行元 明星中学校・高等学校 図書館



【教科別 おすすめ本 展示中です ♪】

図書館でそろえる本は小説ばかりではありません。例えば、授業に関して何かを調べたいときにも対応できるように、各教科の先生方とも協力して資料を選んでいきます。

たとえ直接授業に関係なくても、時間に余裕のある時に好きな分野の知識に触れることは、心をとても豊かにしてくれます。英語好きの人には洋書や洋楽のガイド本、数学好きの人には日常に潜む数学的パズルなど。最近は理数系に興味のある生徒が多い様で、物理や宇宙関係の本もよく利用されています。また、SDGs が身近になったこともあり、環境や国際関係などの社会問題から、将来の職業に関する本も人気です。

もし読みたい本が無い時はリクエストしてください。(リクエストボックスは図書館内と職員室前にあります)

現在、今年度購入した教科ごとの本を、図書館入り口脇の展示コーナーで紹介中です。第一弾・展示中は、数学科・理学科・芸術科(美術・音楽・家庭科)・体育科。第二弾は国語科・英語科・社会科です。その教科が苦手な人にも、興味の入り口として手に取ってもらえると嬉しいです。分散登校中ではありますが、ぜひお子さんにおすすめてください。



【高校生直木賞とは?】

先月、第164回(2020年下半期)芥川賞に21歳現役大学生・宇佐見りんさんの『推し、燃ゆ』(河出書房新社)、直木賞に『心淋し川』(西條奈加さん・集英社)が決定しました。NEWS・加藤シゲアキさんの『オルタナート』(新潮社)がノミネートされたことでも話題となりましたが、図書館では、候補作が発表されると、すぐに蔵書に加えるようにしています。また歴代の受賞作の多くも図書館にありますので、興味をもって読んでもらいたいです!

さて、上記の直木賞とは別に“高校生直木賞”というのがあるのはご存知でしょうか? 全国の高校生たちが、直近一年間の直木賞候補作から「今年の1作」を選ぶ試みです。昨年夏にオンラインで行われた第7回大会では、大島真寿美さんの『渦 妹背山婦女庭訓 魂結び』(文藝春秋)が選ばれました。

選考の仕方は、まず参加校を募集、参加校になれば、候補作品を買うための図書カードが届きます。参加生徒は候補全作を読んで評価し、代表者を決めます。そして、全国大会が開かれ、代表者の生徒たちが議論をして、“高校生直木賞”作品を選びます。昨年は32校が参加し、4時間を超える熱い議論が戦わされたようです。今年もオンラインで5月30日開催される予定です。

過去の受賞作を見てみると、第6回『熱帯』(森見登美彦)、第5回『くちなし』(彩瀬まる)、第4回『また、桜の国で』(須賀しのぶ)、第3回『ナイルパーチの女子会』(柚木麻子)、第2回『宇喜多の捨て嫁』(木下昌輝)、第1回『巨鯨の海』(伊東潤)となっています。本家直木賞とはビミョウに違っているので、読み比べてみるのもお勧めです。



高校生直木賞作品

【悪魔は、すべて地上にいる?】

「地獄は、もぬけの空だ。悪魔は、すべて地上にいる」――。

これは、明星大学とも関係の深いシェイクスピアの『テンペスト』(第一幕/第二場)にある言葉です。

1月28日現在、新型コロナウイルスの感染者数は、世界全体で、一億人を突破、これは78人に一人の割合で感染していることとなります。死者数も217万人を越え、このパンデミックが終息する見込みは立っていません。

なかでも、アメリカの死者数は、第二次世界大戦での米軍の戦死者を越え、まさに「悪魔は、すべて地上にいる」といった様相を呈していて、バイデン大統領も「最悪の日はこれからだ」と警戒感を深めています。

日本では1月7日、一都三県に二度目の緊急事態宣言が発令されましたが、京都大学の西浦博教授は「前回と同等レベルの厳しい対策を行えば、2月末には1日の感染者数を100人未満に抑えることができるが、現在のような飲食店限定の対策のままでは、1000人前後で平行線をたどる」と試算しています。

こうしたときこそ歴史を尋ね、人類がどのようにして絶滅の危機や困難を乗り越えてきたか、ということを知ることが必要なのではないのでしょうか。

【「うまい」と「おいしい」の違いとは?】

第二次世界大戦中、イギリスのチャーチル首相は、日本が敗けることを見通していたということが『大戦回顧録』に書いてあります。その根拠は、日本語は曖昧で、参謀本部の命令を末端まで正確に伝えることができないから、というものでした。

ブロガーのはあちゅうさんは「おいしいときに『うまい』という言葉を使う女子とは仲良くなれない」と語っています。言葉には、その人の生活感や人柄、職業などが自然とにじみでる、と言うのです。

確かに、静かな口調の中に豊かな人間性や教養を感じさせる人もいれば、勢いはあるのだけれど、きつとガサツな人なんだろうなと思わせるような語調の人もいます。

今、はやりの「異文化理解」というと、すぐに外国人とのコミュニケーションを想像してしまいがちですが、たとえ相手が日本人であったとしても、生まれも育ちも生活環境も違う「異文化」のぶつかりあから人間関係は成立している、とも言えるでしょう。

だからこそ、言葉は正しく明確に使う必要がありますし、それに伴って読解力も大切となってくるのです。

ところが、その読解力を測るリーディングスキルテストの結果分析に拠ると、東証一部上場企業にも、正答率が中学生以下の社員がいる、といます。

国立情報学研究所の新井紀子教授は、この結果を受けて「読解力のない経営者や社員は会社を潰すリスクがある」と警鐘を鳴らしています。

東口ボ君などのAIが、最も苦手とするのが、次のような「同義文判定」の問題です。

「幕府は、1639年、ポルトガル人を追放し、大名には沿岸の警備を命じた。」

この文が表す内容と、以下の文が表す内容は同じか。

「1639年、ポルトガル人は追放され、幕府は大名から沿岸の警備を命じられた。」

正解は「異なる」ですが、高校生の正答率が71%だったのに対し、中学生は57%という結果だったそうです。

こうした中学生並みの読解力しか持たない社員を雇ってしまうと、トラブルが増えて、その部署では負のスパイラルが生まれていく、ということです。

読解力を鍛えると、新しいことを自分で学ぶ力やコミュニケーションスキルが培われて、生産性の向上につながる、とされています。テレワークが増えた今日、積極的に読書時間を増やしてはいかがでしょうか。

